

連載 （供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第三回 祭祀の意味

南出喜久治（令和6年10月1日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

では、まづ、祭祀とは何か、祭祀の道とは何か、といふ定義から認識する必要がありますが、祭祀と宗教の定義については、先に述べましたので、それを踏まへて、祭祀の定義をさらに掘り下げてその意味について述べます。

祭祀には、祖先祭祀、自然祭祀、英霊祭祀があります。これらは不可分一体もので、人々の古い記憶と潜在意識の中に厳然と存在してゐるものです。

今、生かされてゐる己の命は、祖先の命と魂を脈々と受け継いできたものです。そしてその命をさらに子孫が受け継いで家族の繁栄を齎すことができることへの先祖への感謝と感激、さらに、その祖先を遡れば皇祖皇宗へと辿りつくことのありがたさ、かたじけなさに感動し、これらを深く感銘し続けて祭祀を間断なく実践することが祖先祭祀です。これを続けることにより、自家の繁栄と子孫の安寧を誓ふのです。

そして、これと同時に、祖先が自然の恵みを受けて生業（なりはひ）を続けられてきたことを己が受け継ぎ、それを子孫に継承してさらに繁栄することができることを自覚して自然への感謝を捧げ、災害に備へた自立再生社会へと進むことを誓ふのです。これが自然祭祀です。恵を受けたことに恩があるので、一体として恩恵と言ひます。

さらに、自らの共同体、社会、国家に襲ひかかった危機から多くの人々を守り、共同体の発展に偉大なる貢献された偉人、聖人などの英霊の存在によつて生かされてゐるものの感謝を表すために、祭祀を実践することが人間の自然な発露としての喜びを感じることができるのです。そして、災害などが起これば、英霊の行ひに続いて「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」ることを誓ふのです。これが英霊祭祀です。ここで英霊といふのは、これらの

優れた貢献を行ひ、それに尽力された方を言ひ、陣没された方に限りません。

そして、これらの祭祀が宗教と異なる決定的な特徴としては、祭祀には、祖先や英霊や自然物と人との対話、交流がなされるといふ双方向性があることです。尊崇する祖先、自然物、英霊を「カミ」として、祭祀を斎行する際に、カミ（神）と人との間で、感謝と祈りが諭しと向き合ひ、うけひ（誓約、盟誓）がなされ、共に食事（神人共食）をし、語り合ひがなされるのです。

「すめらみこと」とは、すめら（総）みこと（命）のことで人類生命の源泉です。世界の人々が生命の源泉の祖先から生まれて命と魂を受け継いでゐることを知つて祭祀を行へば、いつか争ひはなくなります。

この指止まれといふ独善によつて信心の有無で差別する宗教では争ひの火に油を注ぐだけです。そんな宗教とは対極にあるのが信仰が祭祀なのです。